

## 哲学者の言葉より（その1）

吉田健太郎

（愛知教育大学社会科教育講座）

2020年は新型コロナウイルスの世界的蔓延によって、日本でも社会生活において多くのことが制限され、大学の授業も対面ではなく、遠隔授業で実施せざるを得ないという前代未聞の状況にある。そのため、筆者はこれまで講義録などは作成することなく、哲学者の著作からの翻訳抜粋を資料にして、口頭で解説を加えていただけであったが、講義録として文書に書き記す機会をえた。授業名は「哲学史概説Ⅰ」である。15回の授業で、古代ギリシアのソクラテスから近代のカントまで、7人の代表的な哲学者の主著からの抜粋をもとに、内容解説していくという形を取っている。ここでは、ソクラテス、プラトン、アリストテレスの3人についてまとめたもの（授業5回相当）をもとに、あらためて「哲学者の言葉より」と題して、取り上げてみることにする。それとは別に、この機会にカミュ『ペスト』を読み、それに触発されて「読書感想文」なるものも書いたので、冒頭に載せておこうと思う。そこから、ソクラテス、プラトン、アリストテレスにつながる線を、自分なりに強引に見出したからでもある。

\*

カミュ『ペスト』を読んで、心に引っかかった文章が3つほどあったので、それに自分なりの注釈を加える形で感想を述べてみたい。

「結局最後のところで気がつくことは、何びとも、最悪の不幸のなかにおいてさえ、真実に何びとかのことを考えることなどにはできないということである。なぜなら、真実に誰かのことを考えるとは、すなわち別々に、何ものにも一家事の心配にも蠅の飛んでいるのにも、食事にも、かゆさにも一心を紛らされることなく、それを考えることだからである。ところが、蠅やかゆさというものは常に存在する。それゆえに、人生は生きることが困難なのである。そして、この人々はそれをよく知っているのだ。」（新潮文庫、宮崎嶺雄訳、356頁）

ここで言われていることは、われわれが関わるのは常に一般的な「ひと」であって、かけがえのない「個人」や「個性」は常に忘却されている、ということではないだろう。特定の他者だけではなく自分自身についても、日常性や平均性のなかで、自己忘却、自己疎外、自己回避が気づかれず起こっているのだというのも、見当ちがいな読みであろう。まして、真実に「自己」や「他者」に向き合うべきだ、といった道徳が説かれているわけでもない。人々の悩みは、「他者」や「自己」について真実に考えるべきと分かっているときにも、それに専念集中することが叶わず、常に、自分の身の回りに起こる出来事に関わらざるをえないと

いう、人間本性に根差した「不条理」への苛立ちにある。生きるのが困難なのは、真実を知らないからではない。ある学者は、真実の自己を取り戻すことが大事だという。別の学者は、真実の自己など虚構にすぎないのだから自己への執着から離れることが大事だという。物知り顔の学者連中は、自己を取り戻せば、自己から離れれば、それで問題は解決されると楽観的である。しかし人々は、そんなに人生は甘くないことを知っている。もちろん、世俗的な意味での「甘さ」を言っているのではない。問題は、理屈に捕らわれた動物である人間に課された知的「原罪」に関わる。理性的動物である人間は、「合理的」に説明することが真実を解明することだと考えがちであるし、合理的に立てられた問題には必ず解があると信じて疑わない。理想的状況における一般解にすぎないのにもかかわらず。また、科学的精度を上げていけば、やがてすべてを予期できるという邪推さえも信じてしまいがちである。しかし出来事は、人間の「理屈」では「わりきれない」からこそ、「生きることが困難なのである」。そして、「人々はそれをよく知っているのだ」。

ところで、人々はよく知っているにしても、それは諦念や達観といったものなのだろうか。それも違うような気がする。

「人々は相変らず同じようだった。しかし、それが彼らの強味、彼らの罪のなさであり、そしてその点においてこそ、あらゆる苦悩を越えて、リウーは自分が彼らと一つになることを感じるのであった。」(同 457 頁)

いわゆる専門家たちは、変わらなければならない、意識変革が必要だという。臨機応変に事態に対応する能力が求められているのだと。にもかかわらず、世間の人々は相変らず変わろうとしない、といて咎めるかもしれない。ここではしかし、「人々は相変らず同じ」であることは批判されるどころか肯定されている。これはどういうことか。表面的には、知識人が大衆のもつ「図太さ」や「素朴さ」、それらにもとづく「生き抜く知恵」に感心しながらも、全き肯定という形ではなく、そこに一種の「憐れみ」や「蔑み」の念が含まれた形で、限定的に肯定していると見えるかもしれない。無知の強味と言われるものである。しかしここでの肯定的評価は、やはり「心からの」全幅的肯定とみるべきだろう。では何が肯定されているのか。それは、人々の「生きること」への向き合い方が示す「強さ」ではないだろうか。ここで「強さ」とは、「分からないこと」「わりきれないこと」を肯定的に受容する態度のことである。知識人は、「分からないこと」を何とか「分かろう」とする。知識人が合理化したがるのは、「曖昧なこと」「わりきれないこと」への一種の「恐怖感」が根底にあるのかもしれない。それに対して人々は、自然そのものが、それじたい「わりきれない」ものであることを知っている。人間理性による合理的説明によって「わりきってしまう」ことによって、逆に真実が覆い隠されてしまうかもしれないことを知っている。人生を生き抜く知恵として、「自然にしたがって生きる」ことが最善であることを知っている。

「自然にしたがう」ことは、たんなる諦観や達観ではない。無限なる生成の力そのものを肯定することである。生成それじたいである自然には、目的や正解があるわけではない。生物としての人間は、与えられた環境に応じて、たえず試行錯誤しながら、生成変化を重ねながら、存続していく。存続しなくなるということは、生成活動から離れることである。したがって「自然にしたがう」とは、自らが自然の一部であって、自然の生成活動に参加してい

ることを自覚することであり、それを「善し」として引き受けることでもある。そして人々は、すべての人間が一致するとすれば、それは「自然にしたがう」こと以外においてはあり得ないことも知っているだろう。それゆえにまた、自然（本性）にしたがって生きること、それは最も罪なき生き方でもある。なぜなら、「自然にしたがって生きる」ことからもたらされる喜びは、すべての者が等しく享受することができる「精神の糧」であるからである。誰かが独り占めできるようなものではない。ある者がそれを享受することによって、他の者が享受できなくなるような、排他的なものではないからである。

医師のリウーは「あらゆる苦悩を越えて、自分が彼らと一つになることを感じる」わけだが、これは、「心の平和」に到達するためにとるべき道があるとすれば、それは「共感ということだ」という、友人のタルーが残した言葉に呼応するだろう。ここで「共感」は、たとえば弱者への共感といった意味で言われているのではないことは言うまでもない。自然本性への共感である。すべての者が「一つになる」とすれば、それは「自然の絆」による。そして「人々はそれをよく知っているのだ」。リウーは、ペストに襲われた人々の記録を、彼らのためにも書き残しておかねばならないと決心した理由を次のように記している。

「天災のさなかで教えられること、すなわち人間のなかには軽蔑すべきものよりも賛美すべきもののほうが多くあるということを、ただそうであるとだけいうために。」(同 457 頁)

\*

### ソクラテスの言葉より

「アテナイ人諸君、わたしは諸君に敬意と愛情を抱く者ではあるが、諸君に対してよりはむしろ神に従うであろう。そしてわたしの息のあるかぎり、またそうすることのできるかぎり、わたしは知恵を愛し求める〔哲学する *philo-sophia* = 知恵を愛すること〕ことも、また諸君に忠告することも、また諸君のうちのだれであれ、その時々に出会う人にわたしがつね日頃語っている次のようなことを語りながら示すことも、誓ってやめはしないであろう。

すなわち、世にも優れた人よ、君はアテナイ人であって、知恵と力にかけては最も偉大にしてかつ評判の高い国の人でありながら、金銭のことを、それができるかぎり多く自分のものとなるようにと、また評判と名誉のことを気遣っていて恥ずかしくないのか。他方で君は知と真実のことを、また魂のことを、それができるかぎりよいものとなるようにと気遣うこともせず、また気にもかけないのか。

諸君のうちのだれかが異議を唱え、自分は気遣っていると主張するならば、わたしは彼をすぐには放すことはしないだろう。わたしも立ち去りはせずに彼に尋ね、彼を吟味し、詮索するであろう。そして、彼が徳〔魂の卓越性〕を所有しているとは思われないのに、彼はどのように主張しているとわたしには思われるならば、彼が最大の価値あるものを最小の価値しかないものと見なし、より少しの価値しかないものをより多くの価値あるものと見なし、といて彼を非難するであろう。」（プラトン『ソクラテスの弁明』より）

## <解説>

「諸君に対してよりはむしろ神に従う」

「諸君に従う」とは、人為的に設定された習慣・取り決め、時代・場所によって変化する常識・意見・価値観、に基づいて行動することと解釈できる。それに対して「神に従う」とは、アポロン神の「汝自身を知れ」という命令に従うことと解釈できる。その命令は「最も大切なもの」「最大の価値あるもの」を求めることでもある。「人為的なもの」「相対的なもの」ではなく、「自然本性的なもの」「絶対的なもの」「普遍的なもの」の探求こそが価値あるものだとソクラテスは考えたのであろう。ソクラテスは、世間一般の常識にではなく、「本性的なもの」「普遍的なもの」に基づいて生きたいと考えている。当時のソフィストたちが「社会的地位や評判」を最優先にしたのに対してソクラテスは、「魂を、できるかぎりよいものとなるようにと気遣う」ことに専心したのであった。ソクラテスにとって、「魂への気遣い」こそが「最大の価値あるもの」なのである。では、「魂を気遣う」とはどういうことか？

「知恵を愛し求める〔哲学する〕こと」

ソクラテスにとって、「魂を気遣うこと」とは「善く生きること」に他ならない。それはまた「美しく生きること」でもある。「(最高に) 善・美なること」についての探究こそがソクラテスの終生の問いであった。ところで、知識人であることを自慢しているソフィストたちは、「(最高に) 善・美なること」について何であるか知らないのに、知っていると思い込んでいるようである。彼らは自信をもって「社会的地位や評判」を獲得すること、「経済的富」を獲得することが「(最高に) 善・美なること」であると考えている。たしかに地位や評判や経済的富も「善い」ものであるが、それ自体として絶対的に「善いもの」といえるだろうか。普遍的な「善さ」をあくまで求めるソクラテスには、それらが「最高善」であるとは思えなかった。では、「(最高に) 善・美なるもの」が何であるか、ソクラテス自身は明確な言葉をもって指摘できるのか？それは地位や名誉や金銭「ではない」ことは否定的に指摘できたとしても、「善・美なるものについて」それが本当のところ何「である」のか、確信をもって知っているとは断言できるとは思えない。「善く美しく生きるべき」であり、「善い生き方・美しい生き方」を追究・実践すべきであることは分かっている。しかし、自分の生き方が、果たして「真の意味」で「善いもの」「美しいもの」なのかどうか。

ソクラテスがここで、知恵を「所有する」とは言わずに「愛し求める」と言うのも、「善美なるもの」についての「無知の自覚」と関係する。「善美なるもの」を手に入れるのではなく、あくまで「恋い焦がれる」こと。それが何であるか分からないので、不断に問い続けること。分かったつもりにならないこと。安易に答えを出さないこと。確定した正解を見つけ出せないのが問題なのではない。そもそも「正解」が存在するのかどうか、それ自体が分からないのだ。しかし分からないからといって、問いを放棄することは、ソクラテスが自らに課した「善く生きること」のモットーに背くことになる。ソクラテスにとってこの「問い続ける姿勢」こそが、知識の所有ではなく、「知恵の希求」たる哲学的実践なのである。問題となっているのは、たんなる理論的探究ではなく「生き方そのもの」なのであった。

## プラトンの言葉より

「そもそも教育というものは、ある人が世に宣言しながら主張しているようなものではないということだ。彼らの主張によれば、魂のなかに知識がないから、自分たちが知識をなかに入れてやるのだ、ということらしい。あたかも盲人の目のなかに、視力を外から植えつけるかのようにね。」

「ええ、たしかにそのような主張が行われていますね。」

「ところがしかし、われわれの議論が示すところによれば、ひとりひとりの人間がもっている真理を知るための機能と、各人がそれによって学び知るところの器官とは、はじめから魂のなかに内在しているのであった。だから、目を暗闇から光明へ転向させるには、身体の全体といっしょに転向させるのでなければ不可能であったように、生成流転する世界から魂の全体といっしょに一転させて、実在および実在のうちに最も光り輝くものを見ることができるようになるまで、[機能と器官を]導いて行かなければならないだけなのだ。そして、その最も光り輝くものというのは、われわれの主張では、〈善〉にほかならないのではないだろうか。」

「そうです。」

「それならば、教育とはまさに、その器官を転向させることがどうすればいちばん易しく、いちばん効果的に達成されるかを考える、向け変えの技術にほかならないということになるだろう。教育は、その器官のなかに視力を外から植えつける技術ではないのだ。視力は初めからもっているけれども、ただその向きが正しくなくて、見なければならぬ方向を見ないから、その点を直すように工夫する技術なのだ。」

(プラトン『国家』より)

### <解説>

教育とは、たんなる知識の注入であってはならない、という考え方は現代において一般的なものだろう。外から植え付けるのではなく、内なるものを引き出す「導き手」としての教師という考え方である。「子供の自発性を尊重し個性を伸ばす教育」というフレーズはよく聞くところであろう。一見すると上記のプラトンも同じことを主張しているようにも思われるかもしれない。そうだとすればプラトンの教育論の現代性が指摘されることになるかもしれない。しかし、ここでプラトンの主張していることは、教育とは魂の目を、生成流転する感覚世界への注視から離れさせて、「最も光り輝くもの」を見ることができるよう「向け変えること」であり、その「向け変え」が効果的になされるための「技術」が教育なのだということである。単純に自発性に任せばよいというのではない。問題は、学び知するための機能と器官を、いかにして「最も光り輝くもの」すなわち善のアイデアを見るところまで導いていくか、その方法論なのである。しかもその場合、潜在的に眠っているものを顕在化させていくという図式で捉えてしまうと、プラトンの真意を誤解してしまうことになる。「善そのもの」(善のアイデア)を見出させるには、魂の在り方そのものを変えなければならない。これは、単純に知識の量を増やせば達成できるというものではない。知識があっても、それをどのように用いるのか、どの方向へその能力を向けていくのか、その「方向づけ」が間違ったものになってしまうと、ゆがんだ教育になりかねない。たんに子供の潜在的な能力を伸

ばしてやるのではなく、善のアイデアを見ることができるよう、方向づけてやる（道筋をつけてやる）ことが問題になっているのだ。

ではプラトンのいう、最も光り輝く「善のアイデア」とは何なのか？

「ひとが哲学的な対話・問答によって、いかなる感覚にも頼ることなく、ただロゴスのみを用いて、まさにそれぞれで<ある>ところのものへと前進しようとして、最後にまさに<善>であるところのものそれ自体を、知性的思惟の働きだけによって直接把握するようになるまで突き進むならば、そのときこそ、思惟される世界（可知界）の究極に至ることになる。それは、先の場合にわれわれの比喻で語られたひとが、目に見える世界（可視界）の究極に至ると対応するわけだ。」

「ええ、全くその通りです。」

「ではどうだろうか。このような行程を、君は哲学的問答法（ディアレクティケー）と呼ばないだろうか。」

「哲学的問答法の行程だけが、仮説をつぎつぎと破棄しながら、始原（第一原理）そのものに至り、それによって自分を完全に確実なものとする、という行き方をするのだ。そして、泥の中に埋もれている魂の目を、おだやかに引き起こして、上へと導いて行くのだ。もろもろの学術を、この転向（向け変え）の仕事における補助者・協力者として用いながらね。われわれはこれらの補助的な学術のことを、習慣にしたがって、これまでしばしば<知識>と呼んできたけれども、本当はもっと別の呼び名が必要だろうね。<思わく(信念)>よりは明瞭で、<知識>よりは不明瞭なものを示すような呼び名がね。」

（プラトン『国家』より）

#### <解説>

「まさに善であるところのもの」（善のアイデア）とは、「目に見える世界の究極」すなわち「太陽」に類比的なものだと述べられている。太陽から発する光によって事物は可視化し、太陽からのエネルギーをうけて地上の生命活動は活性化する。その意味で「太陽」は、目に見えるもの、形あるもの、の存在原因、しかも第一の存在原因（始原）であるといえよう。ところでプラトンによれば、「思惟される世界（可知界）」の究極原因は、「善のアイデア」だという。「目に見える世界」との対比でいえば、「思惟される世界」とは、目には見えず、特定の形をもつことのない何か、の領域である。果たしてそのような何かなど存在するのだろうか。そもそも存在とか実在とかは、感覚可能・観察可能な何かであって、必ず特定の大きさと形をもっているのではないのか。だとすれば、存在するとは目に見えること、感覚されることではないのだろうか。

プラトンによれば、魂の「転向（向け変え）」の仕事における補助者・協力者としての学術の一つが数学である。たとえば幾何学を例にとってみよう。そこで問題となる「三角形」は、果たして実在するのだろうか。紙の上に書かれた三角形は、たしかに目に見えるものである。しかし三角形について数学者が議論しているとき、この紙の上に書かれた三角形について議論しているのであろうか。描かれた三角形は、三角形一般の具体的事例にすぎない。

描かれた三角形は、三角形について「理解する」助けとして用いられた像にすぎない。三角形とは何であるか、その本質を理解するのに、像は理解の補助としては役立つが、描かれた像そのものが「三角形そのもの」であるわけではない。その意味でも、数学的対象は目には見ることのできない普遍的なものに関わっていると考えてよさそうである。したがって数学的探究に親しむことは、「見ることのできない何か」との関わりにわれわれの目を向けてくれる効果がある。

数学的対象だけでなく、たとえばわれわれに最も身近な「いのち」について考えてみるかどうか。「いのち」とは、われわれの目で見える身体の形状のことを指しているのだろうか。「いのち」がある、「生きている」とは、身体や身体を構成する器官（臓器）が動いていることをいうのであろうか。むしろ順序として逆ではないのか。「いのち」があるからこそ、「生きているから」こそ、身体や臓器が活動できるのではないのか。身体や身体の構成要素を動かす「力」が、「いのち」ではないのか。ところで、「力」は、「それ自体として」は目には見えない。目に見える何かが動かされたことを観察して、間接的に、そこに作用する「力」の存在が想定されるにすぎない。あるいは、直接的に力が「内的に感じられる」にしても、「力」は特定の形をもった何かではない（力は粒子ではないだろう）。

ソクラテスにしてもプラトンにしても、哲学とは「善く生きること」の実践であった。ところで、上記に述べたように「生きること」は、身体器官の諸部分の寄せ集めでもないし、諸器官に還元されて量的に説明される何かでもない。その意味で、目には見えないけれども、しかし最も身近で直に接していることである。ましてや、「思考する力」そのものは、それ自体は目には見えないという意味で、感覚を超えた（感覚されない）何かである。プラトンは、そうした目に見えないものの領域を「可視界」から区別して「可知界」と呼んだ。そして、哲学の探求とは「可知界」に目を向け、その領域における究極原因（第一原因）を探求することだと考えているようである。

## アリストテレスの言葉より

「存在を存在として研究し、存在に自体的に属するものどもを研究する一つの学がある。この学は、いわゆる特殊諸学のいずれのものとも同じものではない。というのは、他の諸学のいずれもが、存在を存在として一般的に考察するのではなく、ただそのある部分を抽出し、それに付帯する属性を研究しているだけだからである。たとえば、数学的諸学がそうである。

さて、われわれが原理を探究し、最高の原因を追究しているからには、明らかにそれらは自然〔実在〕の原因として、それ自体で存在するものでなければならない。存在するものの根源（アルケー）を探究した〔と言われる〕人々（自然哲学者）が、それ自体で存在する原理を探究していたとするのであれば、それらの根源は付帯的意味で存在すると言われるのではなく、存在としての存在の根源でなければならない。だから、われわれの場合もまた、存在としての存在の第一原因を探究しなければならない。」

（アリストテレス『形而上学』より）

<解説>

「存在を存在として」研究する学問とは何だろうか。他の諸学問は、「存在を存在として一般的に考察する」のではなく、「ある部分を抽出」して考察する「特殊的学問」にすぎないとアリストテレスは言う。たとえば数学的諸学であれば、そこで問題となるのは数学的対象の諸特性（たとえば量や形）である。三角形について問われるのは、それが形としてどのような特性をもっているかであって、一般的に何らかの対象が「存在する」とはどういうことなのか、ではないだろう。数学的対象が「存在する」ことは前提としたうえで、特定の性質（数学的特性）についてのみ焦点を当てて考察する。こうしたことは、学問が、それぞれの専門分野に分かれているという現状に相当するといつてよいだろう。物理学、経済学、教育学などいずれの学問も、一般的に「事物が実在するとはどういうことなのか」を問題とする学問ではない。それらは、存在するすべてのものに共通する一般的特性そのものを考察対象にするのではなく、それぞれの専門領域に固有の特徴を考察対象としている。ところでアリストテレスによれば、「存在を存在として」研究し、「存在それ自体に属する」ことがらのみを研究する学問は、形而上学 *metaphysica*（メタピュシカ）と呼ばれる。「自然学（ピュシカ）」を「超える（メタ）」学問という意味である。形をもつ自然物を対象とする自然学が、議論の前提として不問にしたままの、「存在」にかんするより根源的属性を、自然学に「先だつて」考察するというニュアンスが「超える（メタ）」という語に含まれている。なお、「形而上学」という訳語は、「形あるものよりも上位なる学」という意味である。

一般に学問とは、たんなる現象の報告ではなく、なぜそうした現象が生じたのか、その「原理」「原因」「根拠」を説明する作業でなければならない。「存在を存在として」研究する形而上学についても同じことが言える。そもそも何かが「存在する」ということについての「第一原因」が探究されなければならない。そのような探究は、のちに「第一哲学」とか「存在論」と呼ばれることになる。ところで、「形而上学」が問題にするのは、存在の第一原因なので、それは最高の意味で「真に」実在するものということになるだろう。それがなければ、そもそも世界に何かが存在するということもあり得ない何か、存在するすべてのものに先立ち、それ自体はもはや他のものには依存せず、逆に他のすべてのものがそれに依存し根拠づけられるところの何か、そうしたもののことをアリストテレスは「それ自体で存在する」存在の「第一原因」と捉えている。それは「最高な」原因であるかぎり、最も完全な実在でなければならないと思われる。たんなる理想的存在、空想的存在、観念的存在であってはならない。

「われわれの探究しているものは、諸存在の原理や原因である。それは言うまでもなく明らかに、存在としての諸存在の原理や原因である。

たしかに、健康であることや幸福であることにもその原因があるし、数学的対象にもその原理とか構成要素とか原因がある。一般に、あらゆる推論的な学や推論を含む学は、厳密的であれ概略的であれ、何らかの意味で原因や原理をその探究対象としているだろう。とはいえ、これらの諸学は、存在の研究に専念するにあたって、特定の存在のみを研究し、特定の類のみを抽出する。つまり、これらの諸学は存在を端的に、すなわち存在をただ存在として研究しているのではない。しかも、研究対象の本質〔それが何であるか〕について何の説

明もせず、それを感覚的に自明であるとするか、それを前提として仮定したまま研究を出発しているのである。

それゆえ、諸存在の実体や本質を論証することは、明らかにこのような〔推論的学の〕方法によっては不可能であって、他の解明方法によらねばならない。」

(アリストテレス『形而上学』より)

#### <解説>

前回と同様、形而上学が他の諸学と探究対象および探究方法において、いかに異なるかが示されている。数学者は、そもそも「数学とはいかなる学問であるか」「数学的学問の本質とは何か」について説明することを務めとはしていない。数学者にとって、「数」が存在すること、「図形」が存在することは自明である。物理学者にとって、この宇宙が存在し、そこに自然物が存在することは感覚的にも自明なことである。すでに存在してしまっている宇宙や自然物について、そのメカニズムや法則性を探究するのが物理学者の仕事であろう。アリストテレスによれば、そのような専門諸科学とは違って、形而上学は、存在の「根拠」に迫るものでなければならない。存在する事物が「たまたまもっている属性」(偶有性)ではなく、存在する事物であるかぎり「必然的にもっていなければならない属性」(実体性)、それを欠いてしまえば存在するとは言えなくなるような本質的属性、について探究するのが「形而上学」である。それゆえ、形而上学が他の諸学問とは別の方法論を必要とすることは当たり前のことだろう。プラトンはそれを「哲学的問答法」と呼んでいた。

いかなる事物であれ、それが「存在する」かぎり、共通にもっている属性とは何かを問うことが、「存在それ自体」に即して問うことである。その探究を通じてしか、そもそも「存在するとはどういうことか」は明らかにならないだろう。われわれが「生きていること」も、「存在すること」の一つの在り方であるとすれば、「善く生きる」ことの探究も、「存在それ自体」の探究によって根底で支えられているはずだし、「善さ」についても、究極的には「存在そのもの」に即して考えられなければならない、というのがアリストテレス流の考え方になる。ここには、人間の行為、とりわけ思考活動も、「自然本性的な原理」に根拠づけられているというギリシア的世界観が基礎にある。物理的な「存在」の領域と、精神的な「価値」の領域とを、二元的に区別する近代以降の発想とは異なる、ギリシア独自のコスモス(調和)概念が根底にある。

\*

以上、古代ギリシアの代表的な哲学者3人からの抜粋を見てきた。全15回の授業のうち5回分に相当する。次号に続編として、中世の哲学者トマス・アキナスと近世の哲学者デカルトを取り上げた講義録(5回分)を紹介することにする。さらに次々号で、ロックとカントを取り上げた講義録(5回分)を紹介することにする。